



青々と繁った麦畑の中を歩く児玉さん。畑の一角を研究用に提供してくれている長沼の生産者とは、二十年來の付き合い。「農家の人たちとのかかわりかけなければ、研究は成り立ちませんでした。僕の研究を理解して、ずっと応援してくれるのがありがたいですね」



●病虫害の生態解明に挑む、飽くなき探求心

植物病理のスペシャリストは
まだまだ少ない。
一つクリアしても、またその先に
新しい課題が見えてくる。

〔札幌市〕
児玉不二雄さん

（農学博士・北海道植物防疫協会会長）



早朝からの
フィールドワークが日課

初夏の麦畑の中をゆつくりと歩きながら、時折り腰をかがめては葉を手にとりて眺めている人物がいます。ポケットから出したルーペでじっくりと葉の裏まで観察し、時には根本をかきわけて茎の様子を調べ、また歩き出す……。広大な畑で麦の生育状況をチェックしているのが、農学博士の児玉不二雄さんです。

現在、北海道植物防疫協会会長を務める児玉さんは、約四十年にわたって、タマネギや小麦、レイシヨ、豆類といった北海道の主要農産物における病虫害の生態解明に力を尽くしてきました。北海道大学大学院を卒業後、道内各地の農業試験場で研究を続け、中央農業試験場病理科長、

同病虫害部長、北見農業試験場長を歴任。2000年に北海道植物防疫協会会長となつてからも、病虫害や農業の研究に組み続けています。

児玉さんは、何よりフィールドワークを大切にしています。「夏になると、毎朝5時には畑に出ています。場所が自宅近くの岩見沢周辺から、長沼、恵庭、時には十勝の方まで足をのほすことも。事務所まで二日座つて過ごすことは稀かな」と笑います。

協力してくれる農家との
二人三脚で

児玉さんの研究に欠かせないもの。それは協力してくれる生産者の存在です。病

ということを理解してくれているんです」

以前、旭川で開いた勉強会で、児玉さんはとても感動的な体験をしたそうです。「60歳をとうに越えた農家の人たちが、とても熱心に病虫害や農業のことを学ばれていました。そのときに、難しい話をするよりも、その人たちと目線を同じくすることが大切だと知りました」。食の安全・安心に注目が集まる現代ですが、そうした時代だからこそ、消費者にも生産者にも病虫害の仕組みや農業のことにもっと関心を持つてほしい、と児玉さんは言います。

「まだまだやるべきことがある」という情熱

植物の病気の多くは、ウイルスやバクテリア、それにかびによって引き起こされる伝



麦の根本や葉を確認しながら、「おっ、うどんこ病がちゃんと発症してる。これはいいですね」とうれしそうな様子。以前、大学の教え子からは「カビがかわいいなんて、信じられません」と言われたこともあるそうです。



この麦畑では農業の実証試験を行っています。ブロックごとにさまざまな条件を設定して、薬の効果や散布のタイミングなどのデータを収集・分析します。



「フィールドワークよりも、フィールドワークのほうが楽しいよね」と笑う児玉さん。春から秋にかけて精力的に畑を回り、タマネギや小麦、豆、農作物野菜など、様々な農作物の病虫害について研究しています。

害虫の研究は畑で実証試験を行うことも多く、実際に病気を発生させる必要があります。研究の必要性を理解し、畑を提供してくれる協力者がいなければできない作業、と児玉さんは言います。「長い付き合いで『畑を好きに使ってください』と言ってくれる人や、病気が発生したら『先生、ちゃんと病気が出て良かったねえ』なんて言ってくれる人もいます。畑を貸してくれる人にとつては何の得にもならないけれど、長い目で見たときに地域のメリットになる

染病です。児玉さんの研究は、そうした病害の発生する仕組みを解き明かし、防除に役立てることを目的としています。「植物病理学はとても複雑で、難しい分野です。例えば、人間がどんなに体力をつけても、インフルエンザを封じ込めることができないように、植物の伝染病も体力づくりだけでは防ぐことはできません。実際に病気になるたら、薬が必要なのは植物も人間も同じ。そんなふうと考えてみると、少し身近に感じられるでしょう」

研究には、病虫害への愛着が何より必要、というのが児玉さんの持論。顕微鏡で見るカビをかわいいと思う、と笑います。「植物病理学のスペシャリストは、医者のような存在。豊富な知識を持つ人材は少ないため、まだまだやれることがたくさんあります。それが僕らの原動力になっているのかもしれないね」